

令和元年度第2回総合教育会議議事録			
日時	令和2年2月14日 18:00～20:20	場所	真庭市役所 3階 応接室
出席者	市長 : 太田 昇 教育長 : 三ツ宗宏 教育委員 : 中井靖典、井口利美、常本直史、徳山周一		
協議事項	<ul style="list-style-type: none"> ・就学前からの一貫した教育環境について ・真庭市らしい社会教育を基盤とした、人づくり・地域づくりの充実について 		
経過及び結果	<p>○開会</p> <p>○市長挨拶</p> <p>市長：</p> <p>高等教育機関の設置関係について、この場でも報告させていただきます。</p> <p>真庭市に高等教育機関がほしいというのは昔からありました。大学誘致できないか外国人の労働の関係で何かできないかという可能性調査をやってきた。その結論としては、人口減少の中で高等教育機関の誘致は困難だということ。日本全国の高等教育機関にアンケートしたが、なかなか厳しい結果だった。一方で来年度の予算で計上するが、東京晴海にある隈研吾さんの CLT のパビリオンを蒜山に持ってくる。この間、第3者委員会を作って蒜山全体の観光振興の議論してきた。そのパビリオンの移築を契機にどう真庭全体で広げていくのか。そういう中で、隈研吾氏と縁ができた。その隈氏が岡山大学に新しく新設する建築コースの特別招聘教授に就任することが決まりました。岡山大学として 2021 年4月に建築コースを設置し、その後大学院や教育研究施設を設置していくこととしているとのこと。その中で大学から大学院や研究者の施設を真庭に作れないか、研究所の箱ものを作るのは地元でできないかという話しもある。真庭市としては、是非誘致したい。その際には、岡山大学だけではもったいないので、木材関係の研究ゾーンとして整備していくために県の研究所、県立大学、国の機関も議論に入れて実現させていきたい。なかなかいい返事がすぐに出るものでもないのはわかっている。実際に国の機関の地方移転が進んでいない。しかし議論の中に国の人間も入れるというのは霞が関の内諾をとれている。更に研究ゾーンの中に民間の木造住宅関係の研究する場を作るといったことも誘致していきたい。</p> <p>議会の全員協議会で報告した際の雰囲気としては悪くはないという感じだった。</p> <p>この事業については真庭の地域価値を上げていくことのひとつにしたい。地域産業に結び付けていきたい。大きな挑戦ですが、ここまで来ているので是非実現していきたい。こういう大きなことを考えるには、歴</p>		

史に学ぶ必要があると思っている。岡山大学の医学部はなぜ今のような発展に至ったのか。それは岡山県が当時の5万円とともに医学校の財産を提供するなどして誘致した。今回の木材研究ゾーンの整備のためにはある程度の大胆な投資をすることが必要だと感じている。

過去の教訓で学び、次の世代につなげていくということもあるので、就学前からの議論、社会教育をどうしていくのかという闊達なご議論をしていきたいのでよろしくお願いしたい。

就学前からの教育ということで教育委員会からの提案をお願いしたい。

○協議

(就学前からの一貫した教育環境について)

教育長：

教育委員会での今回の内容は、0歳から15歳がメインになる。その提案内容を資料として整理してきた。

子供は未来そのものである。地域の将来を担う子供が地域の将来そのものである。しかし、子供たちに地域の将来をすべて押し付けようというものではない。その中で、全てのこどもが能力を伸ばすためにどういう環境を準備するのかというのが最も重要な課題であると思いますので、今日の議論とし共有したい。

第2次真庭市総合計画にもあるようにまちの未来は市民一人ひとりの可能性と真庭市の多様性とあり、真庭市をつくる最重要の課題が人を育むこと。日本のほとんどの地域が人口減少、高齢化が進んでいる、その中で良くも悪くも真庭市は先進地である。

改めて教育基本法と真庭市総合計画と真庭市総合教育大綱を整理した。3つとも同じことを目的としている。一人ひとりが自分の能力を発達させる、人格の完成を目指して主体者になるということである。

教育委員会は教育大綱を踏まえた知の循環社会の形成を目指して進んでおり、その中で子供の育ちを見守りながら地域の子供と大人が育ちあい地域も育っていく環境づくりを整備することを進めている。その生涯学習の知の循環社会を図に示している。接続については、関係者の努力のもとで連携と協働を実施している。教職員の交流・合同研修の実施、子供の交流もやってきている。地域全体で子供をはぐくむ環境も育ちつつある。その中で課題も見えてきた。

一つ目の課題としては、真庭の資源を活かすということ。

資源とは、真庭に存在する人モノコトすべてであり、伝統・文化・意思なども含めた幅広いものと捉えている。それが地域の中で一貫して生かされているか。地域の人々の意志を共有し、地域の資源を組み合わせ生かしあうことが真庭らしさだと思っている。それを問い直すことが改めて必要がある。実際、真庭市の最近の子供たちにとって自然体験が少

ないと感じている。しかもどんどん少なくなっている。自然の中で自分たちが遊び道具を作り出すという体験・喜びが薄れてきている。

二つ目の課題は一貫教育という考え方が共有できているかということ。

教育内容や接続については、関係者の努力で地域の中で交流連携がずいぶん進んできているが、園や学校など教育機関内だけの話で、家庭や地域全体で子供の育ちを応援する環境がまだ整っていないと考えられる。子供の人格は、家庭、園、学校ばらばらで育てていくのではなく、総合的に育まれていくものだと考えている。効率的に知識を身につけたり、多様な課題に効率的に対応するために、それぞれ役割分担、細分化がされてきた。それが必要であったが、現在、子供たちが育む力を考えたとき、未知を切り開く想像力や自分で考えつなげてみんなでやるチカラの育成が望まれている。不透明な時代を生きていくための知識であり、コンテンツではなくコンピテンシーが必要。そうであれば、今まで通りの状態ではなく、育ちを見守り育てる環境として、細分化されてきたものを見直すことが求められているのではないか。具体的な提案はないが、資料にあるように、30年後を担う人を育むため、いま、どうすれば「真庭の資源を生かした就学前から一貫した教育環境」が実現できるのかを、組織、人、地域について、それぞれに在り方や連携、協働について、多面的に考えていきたい。

市長：

資源というのは、モノだとか具象と考えてしまいがちであるが、自然から地域の風習・雰囲気といった抽象的なものも含めた広いかたちで、真庭の資源を生かした就学前から一貫した教育環境について、自由に議論していきたい。

徳山：

飯田市に視察に行ったときの感想を述べたい。飯田市ではコミュニティスクールを導入していた。これからの社会では、コミュニティスクールなしにはやっていけないと感じた。いい勉強をさせていただいた。保護者、地域を巻き込みながら教育をやっている。子育ての目標を皆で共有することが重要だと感じた。共有ができていると負担と感じることがない。共有ができていないと関係者の中でやらされている感につながると思った。現役時代に知っていればもっとよいものになれたと思った。

常本：

小さいときから愛情をしっかりと注ぐのが大切、そのための環境づくりをするのが行政の役割。分担するのではなく、みなでいきつく先を見据えて、最終的にこういう人になってほしいというのか、その子どもたちが大人になることをイメージの共有をしながらやっていくことが必要なのではないか。最近は論理的思考力が大切だと言われている。論理的思考力を養うには批判的に物事を考えるのが重要で、そのためには当た

り前のことに疑問を持つという意味でも地域の中での教育が重要になってくる。私自身は子供たちに正義を教えてきた。正しいことを教えるというのが根底にあってその上に学力が必要。

最初の市長の挨拶にあったように、教育も長期投資ということでやっていくというトップの姿勢は好きだ。日本ではそのようなことになってない。現場は工夫しているので、そこにお金をかけていくべき。現場の考えをもとに行政が具体的なものにしていく。すぐには結論がでないかもしれないが現場と行政の協働でいいものになってくる。高等教育機関は真庭にそれらしいものは必要。一貫した教育の中では子供たちの関わりが重要。高校生は小学生とのマッチングはいい。高校生にとっては大学生、社会人とのかかわりがいい。中学生が就学前の子供と触れ合うのがいい。そういうのが真庭で出来たらいい。情報はクリックすれば入る。本も読めば知識は入る。自分の中で解決するのではなく、動きの中で、足で稼ぐということをやっていく必要がある。そうすれば市民として活躍する場も生まれていく。

井口：

今回の協議事項に関して教育委員会でも話してきているが、まとまりきれていない。申し訳ないが自分の中でも混乱している。自分の子育てを思い出しながら考えると、最初は子供と一対一でやってきて、その後成長するにつれて集団の中に入っていった。その時は正直ほっとした。これは回りの人たちも一緒だと思う。小学校に入りお互い成長し、中学校では向き合いながらやってきた。高校。大学では親離れをして今は社会人となっている。子供も私も成長できたのは真庭市が環境を整えてくれたおかげだと思っている。縦割りとかそれに対する不便は感じなかった。愛育委員さんや行政の方が頑張っていて、素朴な小さな環境があるのが真庭市のいいところ。

一方、支援の必要なたくさんの方がいるのは現実にある。そこにはつながった一貫した支援が必要だと感じている。一貫した教育の最終的な行き先は社会人であり、願わくば真庭市に帰って真庭市を支えてほしい。片方では足元を見つつ、将来を見据えていきたい。行政の中でも各部が子供を真ん中に置いて考えていってくれればいい。市長さんが言った高等教育機関は大きなお城に等しい、それに伴って回りで生活できる人が生まれる。大きな夢のある事業だと思う。

中井：

飯田市では 20 くらいの公民館があってそれぞれコミュニティスクールがある。一つのところを見てきたが、本当に地域の方々がやっている。いろいろな方が主体となってやっている。真庭市もそういう風にやらなければならない。まずは家族から。家族が主体となってやっっていかなければならない。家庭家族を引き出せば結果的にもうまくいくのではないかな。

市長：

飯田市との関係も含めて、コミュニティスクールの話が出た。コミュニティスクールについて真庭市の現状を報告してほしい。

教育長：

令和4年度までですべての小学校をコミュニティスクール化したいと考えている。そうすることで教育について地域みんな考えて協働するというのを学びとして展開したい。そうすることで子供が困難さ不便さを感じても解決する喜び人とつながりの喜びを学べる。もう一つは家庭や地域も元気になっていく効果もある。よくよく考えれば子供は未来そのものであることが共有でき、子供たちに地域みんなが自分事として関わることで地域の誇りになる。人口が減っていく中でみんながつながり豊かに暮らす地域づくりにもなる。これは教育課程を社会にやってもらうのではなくて、教育課程はあくまでも学校であり、それを社会に開かれたものとするという考え方である。地域の実態がそれぞれなので、少しずつやっていきたい。

市長：

真庭らしいというのはどういう風にとらえているか。

教育長：

真庭らしいという一つは自然の豊かさがある。もう一つは、社会で地域で人がつながる豊かさもある。実際のところ中山間地域である真庭市には、不便なことはたくさんある。だからこそ、人がつながり喜びを見出す豊かさがあるって、コミュニケーションを通じて豊かさを体感しているというのが真庭らしいというものであると考えている。

市長：

コミュニティスクールを絞った議論をした。コミュニティスクールをやっていくというのは方針でもあるし、どういう風に特徴もたしてやっていくのかというのは、また、教育会議の場でも議論したい。他に何かあるか。

教育長：

今は社会的にも非認知のチカラが重要視されていると思う。忍耐力などの人間の基礎力、そういったチカラはどうすれば養うことができるのか。人により考えも違うが、子供が幼い時に自然にかかわり体験して不思議なものを見つけたり、夏と冬の水の冷たさを体感したり、遊び道具がない中で自分で作っていく、そういうことの繰り返しで課題解決力や持続力、粘り強さを培っていくことができる。これは中山間地域の強みになる。真庭らしいということで財産になる。

市長：

幼児体験は就学前ということだが、そういうところで時間を過ごす子供たちは、家庭と地域と園となる。その観点から何か意見はあるか

徳山：

コミュニティスクールを進めることで、0歳時から地域で子供を育てるということになると思う。しかし進めることで心配もある。地域の人を中心になってやっているが、非常に大変なことであり、正直負担も大きい。ある特定の人に負担が生じ、大変だと回りが感じてしまうと次につながらないのではないかと思う。飯田市ではそのところで公民館が役割を担っていた。行政の支援。そこが重要。

市長：

今のご指摘を踏まえてみなさんの意見はあるか。真庭市では公民館があるところとないところ、歴史的文化的な違いがある。月田では公民館が地域で活発にやっていると感じるが中井委員から意見いただきたい。

中井：

就学前なら家族だけでいいということではない。おじいちゃんもおばあちゃんも地域も一緒になってやっていくのがいいじゃないか。飯田市では毎月1回は親だけでなく、おじいちゃんおばあちゃんも一緒になって話し合っている。そういう中で就学前の支援をしている。それを真庭でもやっていき、地域の人がやっていくことで、真庭らしさが生まれてくると思う。

井口：

環境面から真庭らしいということもたくさんあるが、都会育ちの私にとってはここにいるだけで素晴らしいと感じる。都会では健診一つでも非常に大変であって全てが事務的なものだった。しかし真庭は違う。保健師さんや地域の方が一緒になってやってくれている。そういう面も真庭らしい。小さなことだがみんなが一生懸命地域のためにやっていること、その大事さをみんなに気付いてほしい。コミュニティスクールは人口減少の中でやらなければならないこと。行政の方はコーディネートしてほしい。間に入って柔軟に対応してほしいなと思う。住民は学校に任せる、学校は住民に任せる。その間に入る方が必要。効率的なコミュニティの作り方が必要だと思う。

常本：

子育てをしていたときには、困ったときに相談できる場所が地域があればいいなと思っていた。悩んだときに相談できる場所、真庭にはそれがあると思う。そこが普通にあるのが真庭らしい。そのつながりでコミ

ユニティスクールになっていくんだと思う。そうする中で学校を変えていく、教員の意識を変えていくことが重要。世の中変わってきているなか、教員が変わっているのか、もっと大胆にやってもいいのではないか。市がやっている循環社会を学校の中でも作ってあげればいい。今の真庭市には人にお金を使おうということも感じられる。ぜひ、真庭というものを更に発信して盛り上げていくことが必要。

市長：

課題としては、色々あるが、今後深めていくことを指摘して次の議題に入りたい。

一つ目は、幼児期の体験で学校だけ、家庭の中だけでは味わえない実体験の豊かさが幼児の時に特に必要。勘の良さ、気づき、誰に倣ったとか誰かから教わったとかではないが、幼児体験の豊かさそういう見えないことが将来大きな影響を持つ。それから物を批判的に考えるチカラ、それを家庭・地域・学校を含めて育み・体験させることができるのか。自然豊かだと言われているが真庭市の子供ができてきているのか。今年度には慶応三田の中等部の写真部生徒さんが真庭に来た。なぜ真庭かと聞くと、バイオマス発電を含めて自然の循環を体験させることができるのでちょっと遠いけど真庭がいい。とのことだった。真庭市の子どもたちに、幼児時代からの豊かな実体験をどう作っていくのかというのが課題。

二つめは、コミュニティスクールをする場合は、だれかの負担だけでできるものではないということ。行政の関わり・環境整備が必要。飯田で言うと公民館活動が主体にある。地域で条件が違う中でコミュニティスクールを充実させていきたいということは首長部局教育委員会と一致している。地域づくりを小学校単位で再編してそこに集落支援員を置くことを考えているが、行政が一律に置くべきものではない。自分たちがこういう地域にしたいから集落支援員を置きたいという地域に置いていく。今は地域が必要としている4か所に置いている。

引き続き、具体的に教育委員会のほうで、また、地域の方との議論をしてほしい。

飯田は飯田で信州教育の伝統がある。自然的地理的に厳しい地域だと思うが、文化的な仕事をする人を輩出している。長野県も松本、長野、飯田と地域の特徴もバラバラであるが、信州大学がいい役割していると思う。合併した大学であるがそれぞれのつながりもあっていいものになっている。無から有ができるものではない。一番大きな悩みだと思うがリニアが来れば良くも悪くも地域は変わる。それをどうするかということが次の課題だと思う。

(真庭市らしい社会教育を基盤とした、人づくり・地域づくりの充実について)

事務局：

－資料 2-1、資料 2-2 に基づく説明

市長：

社会教育の中身そのものと施設の在り方という二つの論点がある。先ほどからも出てきてはいるが、飯田市での視察の感想も含めてみなさんからご意見をお願いしたい。

中井：

工業高校の跡地に行ったのが印象的。大きな施設であるがレストランも土産物屋もあった。素晴らしい再利用であると感じた。あと、小さな公民館でもコミュニティスクールが盛んにやっていた。

井口：

社会教育というか地域人をつくるという言葉を使っていたことには驚いた。地元に戻ってくる子供たちを育てたいとの思いが強い地域であった。久世高校もやっていると思うが高校生が実際に自分たちの商品売りに行くということを勉強している。キャリア教育、地域人を育てる面から言うと高校との絡みも重要だなと感じた。

市長：

商業高校に1年から3年まで行政を中心に郷土教育を教える講座を持っていた。1回きりの講座ではなく、年間を通してカリキュラムを考えている。大学がないから、その分、小中高のつながりを深く考えている。

常本：

大学がない、高校までのつながりを考えるという意識が真庭と一緒に感じた。しかし、飯田市はそれを学校のカリキュラムの中に組み込んでいた。これは最先端と言える。真庭市でも学校をもっと地域に開かれたものとしていくことが必要。学校をあげて地域を学ぶ、地域も教える、そういうことをするとお互いが変わっていく。それが地域の人、子供たちも実感している。その原点のもとにあるのが飯田市では公民館活動であるのではないか。そういう活動に参加しているのは家庭が中心。家庭を支え安心感を感じられる地域になっている。また、松本大学とのつながり、工業高校の跡地を利用した産業振興と人材育成の拠点そこも信州大学とのつながりがあるのはうらやましい。帰ってこようとなる気がする。こういうことをやるからみな集まってほしい。そういうことをやればわくわく感も出てくる。都会にあこがれるのはわくわく感があるから。真庭もわくわくするんだよ、ということが子供たちに伝わればいい。幼少期に愛情を注げば少々外れても戻ってくるだろうと思う。わくわくするようなことを常に考えていくことが必要。

徳山：

公民館の掲示物に興味を持って見させていただいた。地域のことを学校と一緒に非常にとたくさん掲示していた。暖かい取り組み。そういうことで郷育が育っている。飯田市では公民館を職員ひとりでほぼ運営している。その職員が地域の人と関わる中で、チカラをつけていっている。職員の人材育成の場にもなっていると思う。

教育長：

飯田に行って勉強になったなというのは、地域づくりと人づくりを一体的に進めていたこと。その核となるのが公民館であり、住民自治を育んでいる。公民館が学んだことのアクションにつなげている。学ぶだけでなくそれを活かす場も準備されている。自分たちで準備している。市長が言うように飯田では人材育成システムのために公民館主事が組み込まれている。公民館主事が地域の中で自分たちができることは何かということをおぼえておられて、違う部署に行っても活躍している。

コミュニティスクールも公民館が主体となっている。これは真庭と違う。真庭でどうやっていくのかというのが本気で考えている。人つなぎ、学びの場を考えたときに、真庭では広範囲にある学校というものが一つの核になりうると思っている。

中井：

飯田市では公民館がしっかりしていて行政の配置もあり、それは真庭ではできない。地域の方々も一緒に公民館を運営している。どうしてそういう風になったのかということをもっと知りたい。なぜか家庭の方がみんな公民館の活動に参加して頑張っている。盛り上がっているのは地元のみなのちから。誰かがこうしようということではなく子供たちをこう育てようということがみんなで共有できている。

井口：

もともとの小さい部落の小さい公民館も今でも活発なのが素晴らしい。真庭にはなかなか当てはまらないが、真庭でも社会教育委員さんが頑張って学校以外の活動を担っている。その方々が今は60代、70代となっている。それをどう継続してつなげていくかが課題。そこにコミュニティスクールが担っていくのか。その中で、高校生、大学生が活躍してもらうことが重要。動いてくれる方を上手に活用してきめ細かな充実を図るとというのが真庭市らしいのではないかな。

常本：

公民館活動が活発なのは自分が小さいときにしてもらったから大きくなってもしてあげたいという気持ちになっていると思う。スポ少でも一緒。真庭に置き換えたとしてもそういうことはたくさんある。そういう

ことを探るというのもいい。意図的にやるとすると、小学校の中での低学年と高学年のつながりを深める取り組みを実施する。年代間で重なり合ったつながりが学校現場でやる必要があるのではないか。すぐ結果ができるものではないが、飯田市をみてそういうことを感じた。

徳山：

集落支援制度をどう活用していくのか、これも一つ考えなければならぬこと。隈研吾さんのパビリオンは真庭らしさが出ていて素晴らしい。共通した良さのシンボルとなると思うので、それを子供たちが見学に行き誇りに思えるものとしてほしい。

市長：

共通していたのは、コミュニティスクールとの関係性、一貫性についての話題となった。

公民館活動が飯田の基本であるが、真庭と歴史的に違う中で真庭はどこを核にしていけばいいのか。小学校を一つの核としてという意見もあった。

また、飯田市では公民館に派遣されている職員が育っている。あらゆることをやり、地域を見る目を養っていつている。自分たちで考えて工夫をして住民を主人公にさせながらチカラをつけている。職員養成の意味でも考えていかなければならない。

実際、職員は机の上で仕事するほうが楽。住民のところへ行けば苦情もあるし、大変。そこを乗り越えて自分の頭で考えて常に現場から学ぶという姿勢が大切。参考までに言わせてもらおうと江戸時代に寺子屋が多いのが長野と岡山。その伝統が長野には続いている。長野も相対的には気候も厳しく貧しいが教育熱心。交通の便の良さを活用した高原野菜も売りにしている。今は経済的な豊かさに健康管理ができて農村医学もあり寿命も長い地域になっている。

真庭の場合は小学校を活かす。北房小学校では、学校のお披露目会で地域内外から 1,200 人くらい来た。統合として第一段階として成功して、地域で支える学校ができたと思う。これからよりよいものを作っていってほしい。

教育長：

社会教育については、どこがどう担うかというのは正直わからない。先の議論でも、真庭市が将来にわたって発展していくために、人をどうつなげていくのか、一元的に地域をどう作っていくのか。子供をどう育てていくのか、同じものだなと思っている。

北房では、就学前から中学校までコミュニティスクールの体制が整いつつある。公民館でも子供を育もうということで色々やってきている。そういう活動が一部の人が担うのではなく、あっちでもこっちでもやっていく、地道ではあるがやっていくことが大事。

井口：

事務局説明のあった施設の所管の在り方について一言言わせてもらおうと、図書館と公民館は教育委員会かなと思う。博物館は財産管理上、市長部局でもいいのかな。教育はイベント事ではないので、先を見据えて、そのことを理解して一貫してやってほしい。

市長：

図書館の位置づけについて事務局から説明してほしい。

事務局：

図書館の位置づけは教育委員会の方で考えているが、中央図書館をベースに学校図書館も含めて生涯学習の拠点としていきたいという方向性を出していると認識している。

公民館については、真庭市には無いところもあって、地域活動の拠点として悩んでいるところだと思う。図書館については知の拠点として機能強化してほしい。博物館、美術館、特に蒜山に作るものは美術館になる可能性もあるので、今後、教育委員会との協議が必要だと考えている。

市長：

図書館はもっと広い機能を持ったものにして欲しい。図書館法の図書館の原則を守りながらも、ただ本がある、本を読むという場所だけでなく、中央図書館にはミニシアターもあり情報映像文化の拠点としていきたい。そこには賑わいがほしい。せつかくある施設をもっと市民のために柔軟い使い方をしてほしい。今までの固定概念だけでなく、図書館の持つ機能はなんなのかということを考えると、あらゆる人の知的好奇心を深めるものと考えていけばいい。就任当時よりだいぶ変わってきているがもっと変えて欲しい。学校も開かれたものしながら教員の負担を減らしていくことをしなければならない。教員同士が対話できるものにどうすればできるのか。また、教員採用の応募倍率が低い、これは非常に深刻な話だと思う。一方、子供は自己肯定感が低く、自分たちで社会・政治を変えられると思う子供が少ない。そういうことを含めて考えていかなければならない。学校に自由にやってもらうそれを保証するものが大切。条件整備がない中で責任を押し付けるものでは大変。

教育長：

真庭市では、枠の中となるが、その中で思い切ってやってくださいとお願いしている。そういった中で行政がどういう支援ができるのか考えていかなければならない。現場の教員には職に誇りを持って教育にかかわってほしい。仕事への負担が強いが働き甲斐のストレス要因が低い。それに胡坐をかいて無理をさせてはいけない。学校の教員は魅力的な仕

事。子供に関わって変化を見ることができお互いに学ばせてもらえる。その良さを胸はっていかねばだめだろうと改めて感じる。

市長：

行政職員も仕事量が多いだろう、それを配慮しなければならないが、公務員としての喜びはなんだろうと考えると、簡単ではないけれども住民の意識、地域を変えることができること。抽象的にも具体的に現れてきている。例えば、中和の取り組み、住民と行政となりわい塾でうまく回っている。都市部から入ってきた人が住民と関わることで地域が変わる職員も変わる。日本の現状を最も理解できるのは、農山村の職員だと思う。高齢化人口減少の危機感を持ってやっつけていける。これは都市部ではわからない。明治維新は東京では起こらない。ある意味の厳しさのある地方で教育を熱心に行ったところから変わってくると歴史から学んでいる。

徳山：

38年の教員生活の中で1年間だけ図書担当をやった。これは大変な作業だった。司書の配置でも行政としての支援ができるのではないか。図書館と学校の連携が強まっていくこととなると思うので、教育委員会として一貫して所管していくのが大事であると思う。

市長：

中山間地域でも都会とハンディがないようにしていきたいと考えている。都市部では自分の意志さえあればすばらしい本屋に行けるが真庭市ではなかなかそうはいかない。真庭市ではそういうハンディがある。どう少なくするのか。まちの本屋もないと文化度が下がってしまう。もう少しできることがあるのではないかと考えている。

常本：

文化素地が必要ということで、真庭では図書館が整備されてきたというのは素晴らしいこと。学びなおしをするためには、木でいえば根っこを育てるのが大切。図書館に行けば自分で調べることができる。本があれば手に取る。足を動かすことが大事でそうすると人も集まる。

図書館は生涯学習的に考えれば教育委員会が所管すべき、公民館は今の現状をもう少し見ていくことが必要。首長部局と良い関係を保つこと・模索することが必要。美術館でいうと、隈研吾さんのものができれば行こうと感じる。一步を踏み出してもらおう。いい文化芸術の発掘。あと、県北全体で言えることだが、いい歴史があるのに発信ができていない。地域の人が知らない。歴史を紐解くことが重要。京都へ行くと色んなところに説明が書いてある。文化的な心だと思っているので、それを育てていく。真庭にもそういうのをたくさんあってもいい。

市長：

参考までに話すと、蒜山の建物だけ、観光だけでなく、蒜山全体の整備構想を検討している。この検討会には、県南や山陰とも連携を見据え、石川財団やベネッセにも関わってもらっている。3年に1回ずつやっている瀬戸芸、岡山芸、それに加わりたい。鳥取県倉吉市に県立美術館も作られる。そういう連動をさせていきたい。

岡山大学との関係も検討を密にして実現できればと思っている。岡山大学での知的集積部分をこちらでも展開できれば、市民講座をやるなど学びなおしを常にできる地域としていきたい。落合のインターから1時間圏内を考えるとかなりの広範囲にわたる。車ということを前提にすればいい地理的条件にある。

教育長：

今日は真庭らしい教育、真庭らしい社会教育をご議論していただきました。基本的な問題意識は一緒だと感じている。しっかり考え学びそれを実践に結び付ける。そういうことを重ねながらやっていくことが大事だと感じた。少し機構の話になったが、まずは、子供、地域のことを考えて、そのために役割分担としてどう担っていくのかだけだと思う。それを支えるために組織がある。

今の時代、未来を描いて、仲間を作って、強みを寄せ合って一緒にやる。それがないとダメなんだと改めて感じた。教育の分野もそれが胆になる。今日が実質的にはキックオフということとなるが、今後、様々な立場、価値観の方と議論しながら将来を描いていきたい。今日はありがとうございました。

○閉会